

大学教授の仕事と子育て

同志社大学法学部教授 井関 涼子

要約

私は、2人の子どもを育てつつ大学法学部教授の仕事をしている。実家は遠方で、子どものアトピーに悩まされる苦労もあったが、大学教授の仕事は、時間的・場所的拘束が比較的少なく裁量も大きいので、子育てとの両立には向いているといえる。充実した学童保育所に入るために引っ越したことにより、子ども達が豊かな小学生時代を過ごすことができた。学者の仕事には在外研究（留学）が必要で、私は子ども2人を連れて米国で1年半研究した。子どもの小学校などを通じて広がった友人達との親密な交流から得られたものは非常に大きく、米国社会を深く理解することができ、親子共に貴重な経験をした。

目次

1. はじめに
2. 大学教授の仕事
3. 実家の援助がなくても
4. アトピー
5. 学童保育所
6. 在外研究（留学）
7. 子どもの教育など
8. おわりに

師に昇任すると同時に産休・育休に入りました。専任講師として授業を担当し始める直前に育休に入ったので、授業担当に関する調整が要らなかったのはラッキーでした。産休・育休全体で1年間休ませてもらった後、4月に復帰して授業を担当し、娘は11ヶ月で保育園に入園しました。

2. 大学教授の仕事

世間では、大学教授は暇だと誤解されているような気がします(笑)。大学教授の仕事は大別すると、教育と研究と学内行政等の3種があり、後2者は学生の目には見えにくいことや、裁量の幅が大きい仕事が多いからだろうと推測します。教育面では、決められた授業時間は当然ながら休むことはできません。夜遅い講義は子育て中には厳しいですが、私は、子育て中は夜間の講義の担当を外していただければよいをお願いしてきました。わがままはいけないと思って我慢する向きもあるかもしれませんが、子育て期間は限られていますから、終わればそれまでの分を皆さんに恩返しするのだと自分に言い聞かせて通しました。

研究面は、自分の裁量によるところが大きいので、子どもが幼い間は、あまり多くの時間を割けなかったと思いますが、子どもの成長につれて徐々に増え、各種研究会にも参加できるようになりました。論文の執筆が主なので、資料さえ集めて持ち帰れば自宅で何時でもできるというのが、子育て中の身にもありがたい点です。ただ、育児、家事に時間をとられる分、常に

1. はじめに

私は、2人の子どもを育てながら、大学法学部教授として知的財産法の研究・教育の仕事をしています。息子は大学2年、娘は高校3年となり、子育てはほぼ終わろうとしているところです。

私は法学部を卒業後、最初は弁理士になろうと思いましたが、試験合格後、恩師の仙元隆一郎先生に勧められて大学院法学研究科に入学し、学者を目指しました。大学院に入る前に結婚し、博士後期課程2年の時に息子を出産、後期課程2年終了後、同志社大学法学部助手に採用され、6ヶ月の息子の保育園入園と同時に就職しました。当時の助手の職は、授業負担はなく研究に専念できるという身分で、時間的・場所的拘束はほとんどありませんでしたから、研究の仕事をしていたというよりも、ひたすら子育てをしていたというのが正直なところでした。完全母乳で育てたかったので、研究室で搾乳して冷凍保存し、保育園に届けていました。そして、助手の2年目に娘を授かり、専任講

時間不足なので、睡眠時間を削り、締切前は徹夜でパソコンに向かうことにもなります。もっとも、育児がほぼ終わろうとしている今もこれは変わらないので、単に計画性のなさが原因かもしれません。研究は、まとまった時間を割いて、思索や執筆に集中する必要がありますが、子どもの保育園や学童保育所へのお迎え時間になると、どんなに切りが悪くても、思考や執筆を途中で打ち切って駆けつけなければなりません。そして、食事から寝かしつけまで何時間か子どもの世話をして再び研究に戻りますが、中断した時点で思考に戻るのにかかる時間がかかります。毎日相当なロスといえますし、他にも数え切れない妨げはありますが、嘆いてもどうにもなりませんので、自身に「しゃあない！」と一喝して考えないようにしてきました。

3つ目の学内行政とは、教授会や各種委員会の仕事です。私は子育てに手抜きをしたくないと思ったので、仕事には優先順位をつけ、学内行政関係は必要最低限を心がけてきました。子育てが落ち着いてきた頃から、全教員が回り持ちしなければならない役目（たとえば、入試関連の仕事とか、学生のトラブル対応の主任）を引き受けています。

3. 実家の援助がなくても

共働きの家庭では、子どもが熱を出した等のいざという時、実家の助けがある人が多いですが、我が家は実家が遠方で頼れず、専ら夫婦と保育園や学童保育所だけでやってきました。ですので、実家が近くないと共働きは無理なのでは、と心配している若い人たちに、大丈夫と伝えたいです。夫は弁護士なので、仕事は忙しいですが裁量の余地もかなりあり、いつも2人で予定を調整しています。夫婦の協力は必須で、夫が家事育児を半分（以上？）担当しているからこそ続けられています。育児も家事も、人生を豊かにしてくれますし、ひいてはよい仕事にもつながるものですから、夫婦で分担することは、双方共にとってよいことだと思います。大学から徒歩圏内に居を構えたので、授業時間だけ大学に出て、空いた時間に家と往復することができたのも功を奏し、子どもの授業参観などにも参加してきました。

4. アトピー

息子は乳幼児の頃、アトピー性皮膚炎に悩まされました。アトピー自体も大変ですが、治療に対する考え

方が医師により様々で確立されていないことが、精神的にしんどかったです。何が原因なのか、どうするのが一番よいのかがはっきりしないからです。それで、あらゆる書物や情報を集め、病院はいくつか回り、患者の会にも顔を出しました。アトピーの母の集まりでは、アトピーの幼児を抱えて共働きをしていることに大変驚かれ、こちらが驚きました。同じ経験をしている人、大丈夫ですので安心してください。私の場合、息子が保育園児の間は、厳しい除去食をしていました。母乳で育てましたので、私自身も除去食で、会議のお弁当も食べられませんでした。保育園では、私が持参した食材で除去食の給食を作ってください、私は除去食のおやつを作って持参しました。栗やきび等でクッキー、カップケーキからうどん、ちくわまで、あらゆるコピー食品（アレルギーのない食材で似せて作るもの）を作りましたが、これは結構面白かったです。小麦粉の偉大さを痛感しました。息子は小学校に上がる頃からアトピーが軽快し、中学生の頃に一旦悪化した時期もありましたが、その時は小児科ではなく皮膚科に通院したところ、異なる治療法で落ち着きました。

5. 学童保育所

京都市の場合、保育園はどこも充実していて安心できると思いますが、小学生になってからの放課後をどうするかは、共働き家庭の共通の悩みです。現在では国や自治体が学童保育所に力を入れるようになり、状況は随分とよくなってきていると思いますが、私が子育てをした頃は、数も少なく内容もまちまちでした。それで我が家は、京都市役所からすべての学童保育所の情報を取り寄せ、学童保育所に電話をかけるなどして調べ、最もよいと思った学童保育所に入るために、引っ越しをしました。選んだ学童は、保護者が経営する「共同学童保育所」です。子どもの豊かな放課後の暮らしの保障を目指し、親も子どもも一緒に成長しようという確たる理念をもっているところに共感しました。そこでは、子ども達の個性や自主性が尊重され、昔の子どものように戸外で伸び伸び遊ぶことができることや、何より子ども達が生き生きと楽しそうに、剣玉やコマ回しなどに熱中して遊んでいるところに惹かれました。公設の学童は小学3年生までの所がほとんどですが、ここは小学校卒業まで通えました。高学年になれば、もちろん一人で留守番できるのですが、子

ども達は、楽しい居場所なので嬉々として最後まで通い、高校生、大学生になった今でも、時折顔を出すふるさとのようなところになっています。保護者は経営主体なのでたくさんの仕事があり、毎月の保護者会やおやつ、掃除の当番に始まり、親子キャンプに行ったり秋まつりの模擬店を出したり、広報物を発行したりと、年中何かしら働いていました。共働きでそもそも忙しいところに、さらに学童の仕事で大変ねと思う周囲の人もいたようですが、私は、この共同学童で様々な職業の親たちと関わり、子育てについて話し合ったり、他では決してしない経験をできたりして、本当によかったと思っています。親も子どもも仲間を得て、遅く育ちました。変化の激しい今の世にあっては、子ども達に身に付けてほしいのは、世の中がどうあれ、乗り越えていける遅しさと、仲間を作り、大切にできることだろうと思っていますが、そのような力を育むことができた場所は学童保育所だと思っています。

6. 在外研究（留学）

大学教員の仕事の特徴として、在外研究（留学）の存在があります。特に知的財産法のような、国際関係と密接不可分な法分野においては必須と言っていると思います。そして、子どものいる共働き家庭にとっては、難しい問題です。私は、子ども2人を伴い、夫は「単身留守番」をして、米国ミシガン大学ロースクールの客員研究員として在外研究をしました。子ども達は小学2年と5年の時からの1年半でした。これは私にとっても子ども達にとっても、得たものの極めて多い素晴らしい経験となりました。

ミシガン大を選んだのは、研究テーマである、特許発明の試験的使用の例外など特許独占の範囲の制限に関する研究で高名な Rebecca S. Eisenberg 教授がおられたことと、ミシガン大のあるアナーバーが、とても治安のよい街であると先輩同僚から聞いたことが理由です。1人で子ども2人を連れて行くので、まずは小学校と学童保育所についてウェブやメールで尋ねるなどして調べました。米国では、小学校ごとの学力テストの成績や、都市の治安ランキングがウェブで見られます。そして、在外研究を始める半年前に、候補となる住宅地を家族全員で下見しました。家は、大学のウェブサイトの住宅斡旋のページから探し、大家さんと直接メールでやりとりを重ねて、大学から1マイル

の所にある Burns Park 小学校の目の前の一軒家に決めました。やりとりの中で、大家さんの大変温かい人柄が伝わってきたことも決めた理由の一つでした。家賃は高かったですが、先輩同僚から安全はお金で買うものだと教えられました。この地域は、ミシガン大学とその附属病院の教職員や医師が住民の多数を占め、地域の公立中学校は、学力テストの成績が全米一になって話題になるようなところでした。

子ども達は、家の前の Burns Park 小学校（公立）に通い、そこに日本人はいませんでした。子ども達は渡米前の1年間、週1回ネイティブの家庭教師に英会話を習いましたが、結局挨拶程度しか身につけていなかったように思います。それでも、小さな子どもほど語学の習得能力は高いので、3ヶ月もしないうちに、英語を使って現地の子ども達と普通に遊ぶようになりました。1年もすると、現地の人たちからネイティブと全く変わらないねと言われるまでに英語を使うようになり、娘は家でも英語で話していました。

子ども達の小学校や地域の人たちから、米国の文化や社会について学んだことは、はかりしれません。小学校の先生達は自由で、大きな裁量を与えられています。各先生が自由に使える予算があり、子ども達の教材を購入して配布する先生もあれば、クラス全員で授業時間にコンサートや観劇に出かけるクラスもあります。同じ学年でもクラスによってやる事が全く違うことに驚きました。不公平だという声は出ないということです。年度末に、「来年も私の担任するクラスになりたい人は？」と子どもに手を挙げさせる先生、これに対して手を挙げない子、「あなたのお子さんを来年も担任したいと思いますのですが、いいですか？」と親に尋ねる先生と、「嫌です」とはっきり答える親など、日本ではあり得ないような光景がありました。担任の先生のやり方に対して疑問があると、クラスの親のメーリングリストで意見を述べる親もいますし、先生もこれに対して反論します。ですが、ひとしきり議論すると、後腐れなくスッキリ解決します。自分の意見をはっきり相手に伝え議論することが、社会の隅々まで浸透していることを実感しました。また、子どもの個性や能力を尊重した教え方に感心することも多かったです。小学2年でも、読解力を細かく判定して、それに応じた本を一人一人に与えて指導していましたし、算数は成績によりグループ分けし、保護者の中の適任者数人がグループの指導を手伝いに来ていたりしまし

た。親が学校を見学できる機会が日本より格段に多く、私も気軽によく行きましたところ、子ども達はいつも楽しげで、勉強というより遊んでいるようにしか見えない雰囲気でした。小学校に、音楽、美術、体育それぞれの専門の先生がいて、これらの科目にかける比重が大きかったです。特に、5年生になると、全員が管楽器か弦楽器のいずれかを選んで、それぞれの非常勤の先生が教え（楽器は学校が貸与）、バンドやオーケストラの演奏を学ばせてくれるのには驚きました。

学童保育所は、小学校の建物内にあったので通うのが楽でした。内容もよかったです。4年生ぐらまで向きで、娘は最後まで喜んで通ったのですが、息子は5年生の終わり頃になると、面白くないから行きたくないと言いだして困りました。米国では、州法によっては一定年齢以下の子どもを子どもだけで留守番させてはならないと定められているところがあるので。そこで、息子は地域のフラッグ・フットボールチームに入って週2回ほど通ったり、夏休みには湖での7泊のキャンプに参加したりしました。私はフットボールの試合のために車で送迎しなければならず、時間を取られましたが、ママ友と試合を眺めながらおしゃべりを楽しめたのは、よい思い出です。

日本を発つ前に、大先輩の同僚から、書物での勉強は日本でもできるのだから、現地でしかできないこと、すなわち、できるだけ人との交流を深めなさいとのアドバイスを受けました。なるほどと思ったので、私は周囲の人たちと親しくすることに力を注ぎました。大学だけではなく、子ども達を通じた家族ぐるみの付き合いから学んだことが非常に大きかったです。とりわけ、家の大家さんの奥さんは子どもの小学校の音楽の先生で、我が家とほぼ同年齢の2人の子どももあり、帰国後10年を経た今でも、互いの家を何度も行き来するほど仲良くしています。全米から人が集まるアナーバーのアート・フェアや、夏の野外コンサート、クリスマスツリー伐採、ラズベリー摘みなど様々な所に誘ってもらい、日常生活を一緒に過ごし、日本と異なる米国文化や社会のありようについて話をする中で、米国に対する理解が真に深まったと感じました。米国の子ども達は、気軽に友達の家泊まりして遊ぶので、我が家の子ども達も毎週のようにたくさんのクラスメートの家に順に泊まりに行き、我が家にも大勢泊まりに来るので、その親（ミシガン大教授も多い）も含めて親しくなりました。

ミシガン大では、Eisenberg先生から研究テーマについてコメントをいただいた他、知的財産法関係の講義、ゼミや講演会にすべて出席し、内容はもちろん、授業の進め方、教え方についても大きな示唆を得ました。Roberta J. Morris先生の特許法のゼミでは、授業を1回担当させてもらい、職務発明について講義をしました。ちょうど中村修二氏の青色発光ダイオード事件の和解直後であり、これを中心に話したところ、Morris先生は、中村氏と同時期に青色発光ダイオードの研究をしていた研究者をゲストに招いてくださり、有意義な授業となりました。また、当時は米国で特許法改正に向けた議論が進行中で、先願主義への移行の法案についての授業では、議論の主流は、特許法の理念としては先発明主義の方が勝っていることは自明だとするもので、私が、先願主義の方が発明の早期公開という特許法の趣旨にはむしろ適っていると述べると、驚いたように「米国の常識は世界の非常識ということが、まあある。」と言われたのが印象的でした。Eisenberg先生の商標法の授業も、日本の商標法が染みついている私にとって、発想のまるで異なるLanham法が非常に新鮮で、自分が無意識のうちに抱いていた固定観念に気づかされました。

週に一度のFaculty Lunchも、楽しく有意義な時間でした。Faculty Loungeに用意されたケータリングのランチをいただきながら、教授達が毎回一人ずつ自由に研究成果を報告して皆で議論するもので、あらゆる分野の話聞く機会であり、また、教授達の実に自由な議論も刺激的でした。他大学の教授を招くこともあり、採用人事案件の候補者の発表であることもあり、日本の大学の採用人事案件の秘密主義を考えると、その自由さに目を見張りました。

最近では日本にいても、海外から研究者が来日して講演し交流できる機会も多く、インターネットのおかげで海外の情報を得たり、海外研究者とメール等で議論したりすることもできるようになりました。それでもやはり在外研究をして、現地でもとまった期間、生活することによって、活字にならない、普段着の現地の暮らしから得られるものはかけがえがなく、研究を深めるためになくはないと感じました。家庭を持つ女性にとっては、家族をどうするかが大きな問題になります。我が家の場合は夫が一人日本に残りましたが、Skypeのようなネットでのテレビ電話を使って毎日必ず家族全員で話すことを1年半続けたので、日

本で一緒に生活している時よりもむしろ、密度の濃い会話をし、多くの情報を共有できたような気がします。決めた時刻にパソコンに向かえない日もありましたが、その場合はファクスで手紙を送り、毎日の会話は決して欠かさないように気をつけました。また、夏休み、お正月には夫も渡米し、家族で米国旅行もしました。

7. 子どもの教育など

子どもが学齢期になると、親は宿題を見てやったりするのが大変だなどと聞くことがあります。私は、子どもの宿題をみたことは全くなく、持ち物のチェックも、キャンプや修学旅行なども含めて一切したことはありません。忘れたら自分の責任とすることで、自分の力でやっていくことを早くから身に付けてほしいと思いました。そうすることで、子ども達が忘れ物をしなくなれば理想的でしたが、そういうことにはならず、結構忘れ物をしていましたが、隣のクラスの友達に借りるとか、無しで済ますとか、子ども達なりに対処方法を考えて切り抜ける力もまた必要と思いました。

我が家の子ども達は、小学校時代は専ら学童保育所で全力で遊び、中学受験は一切せず、地元の公立中学校に通いました。中学時代は塾に通いましたが、高校(公立)の時は塾も行かず、息子は浪人中に予備校には行きましたが、志望大学に入りましたので、親は特に何もしなくても子どもに任せていればよいと思います。

8. おわりに

子どもを2人育てながらフルタイムの仕事をするのは、大変な時もありますが、苦労の何倍もの喜び、楽しさがあるので、苦労というようにはあまり感じませんでした。子どもが1人の時と2人の時を比べると、労力は1.5倍程度で、楽しみは2倍を遙かに超えます。2人目の子育ては慣れもありますし、兄弟で遊んでく

れるのはとても楽です。子どもというのはいつでも、「こんな時に限って」という大変なタイミングで病気になるったりするものです。私も、助手論文の執筆で大変なときに、幼児だった息子が突発性発疹に罹って夜中じゅう泣くとか、長じてからも、論文締切に追われているときに、中学の部活で骨折して手術を受けるとか、いろいろありました。誰しも経験することらしいので、本当はこのような事態を見越して、日頃から余裕のある仕事のスケジュールを立てるべきなのだろうと思います。自分では決してできなかったことですが、後輩へのアドバイスです。

また、自分の至らなさを痛感して落ち込む瞬間はしょっちゅうありますが、反省して同じことを繰り返さないようにしようと思った次の瞬間には、それ以上悩まないように心がけています。落ち込む暇があったら、改善の努力をした方がよいですし、改善の見込みのない事柄は、考えるだけ無駄なので嘆いたりしません。「自分はあかんなあ」という気がしたら、「あかんからこそ、よりいっそう努力をして、少しでもましにならなければならない」と思うようにしています。

大学教授の仕事は、場所的、時間的な拘束が比較的少なく、裁量の余地も大きいので、子育てと両立させる仕事としてお勧めだと思います。また、学生を育てるという仕事は、子育ての経験が直接生きる場面も多いです。ミシガン大学ロースクールで知的財産法の授業を担当されていた Eisenberg 先生をはじめとする3人の先生、私の帰国と入れ替わりでミシガン大に着任された Jessica Litman 先生、Margaret Jane Radin 先生も含めて全員が女性であったというのは、偶然とはいえ、感慨深かったです。

子育ても大学教授の仕事も楽しく続ける女性が増えますことを、祈っています。お役に立てる情報を提供できましたらうれしく思いますので、お気軽にお尋ねください。

(原稿受領 2015. 6. 22)